

研究会の事務的な仕事についても『実践記録集』の出版計画や、雑誌『技術教育研究』、会報『技術と教育』をより価値高き、より親しまれる出版物としてのくふう、そして会員の拡大、さらには会費未納者への納入依頼等多くの重要作業が山積しています。

また研究会の研究そのものを推進するための研究会、公開研究会、来夏の記念すべき第10回全国大会、他民間教育研究団体との共同研究等これまた事務局に与えられた課題もいっぱいあります。

非力で未熟者の私ではとてもこれらのすべ

てをこなして行けないことはいうまでもありません。今夏の犬山の大会での私の就任に心から激励のことはを授けて下さった皆さんの暖いお気持は終生忘れることができません。幸い私をとりまく事務局・常任委員の方々は皆さんたいへん民間教育研究運動に熱心で、積極的・意欲溢れる仲間です。これらの方々や全国の会員の皆さんの強力なご支援をいただきながら、常任委員会と皆さんのパイプ役を果すべく全力をあげて努力することを誓い事務局局長就任のごあいさつといたします。

(1976・12・13)

< 新 刊 紹 介 >

岩城正夫著「原始技術史入門」

近来になくおもしろい本であった。各章のタイトルを紹介するとつぎのとおり。

1. 原始技術史とは？
2. 道具の起原
3. 人間の道具の起原
4. 飛道具と機械の萌芽
5. 機械の起原
6. 火の利用の起原
7. 火起し技術の起原
8. 発火技術の多様性
9. 道具の発達段階(以下省略)

この本の副題は「技術の起原をさぐる」となっている。「入門」というのがどういう意味かよくわからないが、道具や火の起原を、著者の推量と実験で探っていく思考過程がおもしろい。火起しの部分については、著者が実際にやってみてのことだから、とくに説得性がある。この本を読んだら、自分で火をつけてみたくなるだろう。

ただし、著者が何を「技術」と考えているのかはよくわからない。じつをいうと、省略した10章以下のテーマは、待ち伏せ技術、原始技術史からみた遊び、原始技術史からみた言語、などである。これらが著者の思考の遊びでないのなら、著者にとっての「技術」はいわゆる意識的適用説なのかもしれない。せっかく興味深いテーマを扱いながら、とくに後の章によくわからないところが多いのは、技術の規定のあいまいさに由来しているのではないかと思う。

とはいっても、技術の起原をこんなにわかりやすく書いた本はめったにない。技術教育の実際に関心ある人には一読の価値があろう。(新生出版刊、A5判190ページ 1500円)
(佐々木享)

訂 正 と お わ び

前号(107号)9ページの表の下4行は、6ページの最後に続く文です。おわびして訂正いたします。